慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集「文学社会学の可能性」に寄せて
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学社会学の可能性
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「文学社会学の可能性」に寄せて

鈴木　智之

「文学」と呼ばれる一群の、とはいえ、その輪郭が極めて曖昧な事象が存在する。一般的には、書く、読むという行為を中心に、編集、流通、蒐集、収蔵、批評、研究、教育などの多様な営みにつながる実践群を、あるいは、その行為の中で制作され交換されていく書物やテクスト、及びこれらを介して構成される多様な表象群を、さらには、それらを一括りにすることを可能にするある種の感覚や思考の様式を指して、私たちは「文学」または「文学的」と呼びならわしている。では、この言葉が指し示すもの――文学事象――は、社会学に対してどのような位置・関係に立っているだろうか。文学を対象化する、あるいは文学を媒介とする、もしくは文学に触発される社会学は、どのようにして可能となるのだろうか。

社会学（者）の中に古くから文学への関心があったことは、随所に確認することができる。文学は社会学的な考察の対象であり、同時に着想の源泉であった。他方、文学の実践者（作家や研究者）にとっても、社会学は重要な参照枠組みのひとつであり、理論的土台の供給源であった。にもかかわらず、「文学」と「社会学」の関係を正面から問う研究は、思いの外蓄積を見ていない。また、少なくとも日本では、「文学社会学」という領域が明確に認知され、制度化されてきたとは言い難い。文学を論じる社会学者は少なからず存在するのだが、その営みがどこか好事家の趣味のように見なされてしまう状況が変わらずにある。しかし、文学もまた社会の中に生まれ、固有の制度化を遂げてきた文化実践であり、同時に、社会学に新たな視点をもたらす認識の媒体でもある。たがいに分化しながらも交錯し浸透しあう二つの知の関係を問い直しつつ、文学を、あるいは社会学を論じる可能性は、未開拓のまま大きく広がっているように思われる。

日本では、作田啓一氏を中心として「文学からの社会学」という視点が提起され、その流れを受けて、多くの研究者がそれぞれの視点から、文学と社会学のあいだを切り結ぶ試みを重ねている。他方、フランス語圏を中心として構築されてきた「文学の社会学」の視点を取り込みながら、新しい研究の領野を切り開こうとする動きもある。さらに、文学についての社会（学）的な考察は、カルチュラル・スタディーズやメディア・スタディーズ、歴史主義批評やポストコロニアル批評、あるいは近年興隆を見せるトランスレーション・スタディーズとのつながりの中で、その射程を広げつつあるように見える。

こうした多岐にわたる展開を視野に収めながら、「文学社会学の可能性」を問い直すことをテ

鈴木智之「特集「文学社会学の可能性」に寄せて」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）1-3 頁

ーマとして、三田社会学大会（2018 年 7 月 7 日、慶応義塾大学三田キャンパス・北館３Ｆ・大会議室）においてシンポジウムが開催された。報告者、報告タイトル、討論者は以下の通りである。

報告者：
清水学（神戸女学院大学）：蔵書を整理する――「社会の詩学」の立場から
松下優一（神奈川工科大学他）：カルチュラル・スタディーズか、文学社会学か――「〈沖縄文学〉の社会学」を振り返って
マルクス・ヨッホ（Markus Joch）（慶応義塾大学）：How to gain symbolic capital by provocation and internationalization：Hans Magnus Enzensberger as an example

討論者：
小倉孝誠（慶応義塾大学）、近森高明（慶応義塾大学）

シンポジウムでの報告と討論をもとに、以下の諸論文では、各氏がそれぞれの立ち位置から、「文学社会学」の可能性について考察を展開させている。

清水学氏は、蔵書の整理という営みの内に、世界の混沌と向き合いつつ、自らの生のまわりに秩序を築き上げていく、果てしのない実践の雛形を見いだす。書棚を作るという、その人ごとの傾き―「癖」「偏奇」―を露わにさせる文学的行為が、合理的・形式的な秩序でも、単なる無秩序でもない、生活世界の「整理なき秩序」の範型として浮かび上がる。私たちは日々の社会生活を、このように詩的な実践として成り立たせているのである。

松下優一氏は、主に英語圏における近年の文献にもとづいて、カルチュラル・スタディーズと文学社会学の微妙な関係を問い直し、整理し直した上で、「文学の個別性・特殊性」を「社会的事実」として探究の対象にすえるところに、「文学社会学」の意義を見いだす。

マルクス・ヨッホ氏は、ピエール・ブルデューの「文学場」の理論を応用しつつ、ドイツの詩人、エッセイストであるハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーの台頭戦略について分析を試みている。この作家の急速かつ安定的な象徴資本の蓄積は、挑発的なエッセイストとしての活動、しばしば立場を変更しながら継続された政治的な発言と、翻訳を介して獲得されていく国際的な文学空間での地位の獲得にあった。その生涯にわたる軌跡の記述は、文学場の自律性について、また国内空間と国際空間の関係性について、ブルデュー・モデルの更新と展開の可能性を示唆している。

小倉孝誠氏は、三者の報告の中心的な論点を的確に整理した上で、主にフランス語圏における文学社会学の流れを概観している。「作品」、「作家、流派、運動」、「場と制度」、「読者と受容」などの多岐にわたる主題に応じて、社会学的文学研究も多面的な理論展開を見せ、豊かな成果を上げ続けている。今後も、メディア環境、コミュニケーション手段の多様化を背景として「新

たなかたちの文学」が生まれてくるだろう。これに応じて、私たちは「新たな読解方法」を模索していかなければならない。

近森高明氏は、「文学からの社会学」を「文学の享受経験から出発し、文学の構成的働きに注視し、文学から学ぼうとする社会学」と定義し直した上で、ブルデュー派の「文学の社会学」との差異、とりわけ「文学の固有性」に対する距離の取り方の違いを論じ、「経験としての文学」と「制度としての文学」が生産的に交流可能性を示唆している。

あらかじめ予期されたことではあるが、諸氏の議論はどこかに収斂する気配を見せず、ただ、「文学」と「社会学」をつなぐ様々な道筋を指し示しているばかりである。しかし、その多様な可能性は確かに予感される。「文学社会学」もまたその輪郭がきわめて曖昧な研究の場であるが、その地を耕し、撒いて育てることのできる種がいたるところにある。シンポジウム・特集の企画者としては、その確信を得て非常に心強い思いなのであるが、読者はどのように受け止められるだろうか。

（すずき　ともゆき　法政大学社会学部）